67

中神琴渓の鍼灸

鶴田　泰平
日本鍼灸研究会

中神琴渓（なかがみきんけい）［1744–1833］は江戸時代中期から後期の医家．名は孚，通称を右内，字は以隣，琴渓と号した．別号に生生堂．琴渓は近江国山田（滋賀県草津市）の農家に生まれ，幼くして才知に優れ，大津の医家・中神氏の養嗣子となる（京都中神氏との説もある）．20 歳代に中根之紀に儒を学び，30 余歳の頃に立志発憤して『古方便覧』などの吉益東洞の著述を精読し，また，不理解な部分は人に就いて正誤しその大意を得て，東洞流の水銀駆梅療法により，大津・長等の娼婦達を治療したとされる．寛政 3 年［1791］，48 歳の時に京都に移りて医業を開いた．のちには江戸をはじめ諸国を遊歴して自説を広め，一時は 3000 人とも言われる多くの門人を集めたが，遊歴後は近江国田上（滋賀県大津市田上）に隠棲したり，南山城の僻境に移住して自適に過ごすなどしたとされる．琴渓の医論については舘野正美氏の研究「中神琴渓の医術と医論」（『大阪大学中国研究集刊』47 号 1 ～ 23 頁所収〈WEB にて公開〉）に詳しいが，その主たるものとして「余は法を使う．法に使われず．故によく仲景を臣とす．仲景の臣とならず．世の仲景を奉ずる者，率ね其の糟粕を啗ひ甘して之が奴僕となる宜なり．古人に超乗して之に尚る能はず」「医道に於ては定まれる方をもて無定の病に施す事なれば，規則にてはゆかず．専ら活用にある事なり」などの書中の言に見られるように，『傷寒論』『金匱要略』など伝来の医方を基本としつつも，規則に捉われた一つ覚えのような治療を戒め，患者の状態に応じて臨機応変に治方を組み立てることを重要としている．また，実質的な効果を重視し，治療には古方，後世方の区別なく，効能を第一とし，薬のほかに刺絡（瀉血）も行った．さらに，吐方を一種のショック療法として精神病に用いたとも言われ，寛政 10 年［1798］には山脇東洋の孫の東海による腑分け（死体解剖）に立ち会うなどした．これらの琴渓の幅広い活動は，三輪東朔［1747–1819］の刺絡術を伊藤大助（鹿里）［1778–1838］が筆記した『刺絡聞見録』の大助の序文中に「志行をなす中に独り湯液の及ばざる所を輔翼するものあり．世に云う刺絡の術なり．其の術は瘀濁の悪血を取ると云うものにして，其の事を平安の荻台州が著せし『刺絡篇』にて知り，郭右陶の『痧脹玉衡』を求めて読むに，万病に痧あることを覚える．其の後，高陽朴の『医談』，中神右内の『医談』『雑記』を得て，其の事また詳らかになれり．」とも言及されるように，当時の多くの医家にも影響を与えた．琴渓の後継として，養子の右門の没後に門人・安芸良平がこれを継ぐも，良平没後は途絶えた．著書には『生生堂医譚』不分巻 1 冊（伊藤王佐筆述，寛政 7 年［1795］刊），『生生堂雑記』全 2 巻（保木之光筆述，寛政 10 年［1798］刊），『生生堂治験』全 2 巻（小野匡輔編輯，文化元年［1804］刊），『生生堂養生論』1 巻（坂井道仙・大塚碩庵筆記，文化 14 年［1817］刊），『生生堂傷寒約言』不分巻 1 冊（安芸良平筆述，文政 3 年［1820］刊）などがあるが，すべて門人などによる口述筆記である．この度は，琴渓の行った医術のなかでも，とくに，鍼灸についての詳細を知ることを目的として，『生生堂医譚』『生生堂雑記』『生生堂治験』『生生堂養生論』『生生堂傷寒約言』などに見られる鍼法，灸法の論述部分とその典拠を調査した．